瀬田の丘

創刊 1973 年
編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1

今日のみことば
年間第 14 主日　A 年（2023 年 7 月 9 日）

瀬田教会主任司祭　小西広志神父

第一朗読：ザカリヤ書　9 章 9 ― 10 節
第二朗読：ローマの信徒への手紙　8 章 9、11 ― 13 節
福音朗読：マタイによる福音書　11 章 25 ― 30 節

イエスが課す軛

三つの朗読から

旧約聖書は救い主キリストの到来を準備します。**第一朗読**では救い主の姿を暗示しています。「王」、「神に従う者」、「勝利を与えられた者」、「ロバに乗ってこられる方」、そして「平和を告げる方」。人々の想像とは少し異なる、ユニークな救い主。**第二朗読**でパウロは、救い主であるイエス・キリストは霊に満たされた方だと主張します。そのキリストと同じ霊をキリスト者は戴いているのだから、「肉」というこの世的な価値観から離れて生きなさいと勧めています。**福音朗読**では、イエスが父なる神との特別な関わり合いの中に生きていることが、イエス自身の賛美のことばで明らかになります。

第一朗読の9節にある二つの言葉、「高ぶることなく」「ろばに乗ってくる」に注目してください。「高ぶることなく」は「身を低くする、貧しい」の意味です。神に頼るしかない、神に身を委ねるしかない王の姿が浮かび上がります。つまりこの王は、神に従う人なのです。

ですから、この王は力を誇示するために軍馬には乗らずに、ろばに乗ります。ろばは平和の象徴でもあります（申 17 章 16 節参照）。しかも、「雌ろばであるろば」とありますから、『創世記』49 章 11 節にあるように、ろばをつなげるほどにブドウの木が太くなるという豊かさのイメージが込められています。この王によって豊かさがもたらされるのです。本節では三回「ろば」ということばが使われていますが、それぞれヘブライ語は違います。一回目はハモールです。これは雄のろばを表します（旧約聖書では 96 回使用）。二回目はアートンです「雌ろば」の意味です（34 回）。そして三回目はアイルです（8 回）。これは「ろばの子」の意味です。

「ろばの子」（アイル）に乗ってやってくる平和の王は、戦車と軍馬を絶って（10 節参照）平和を実現させます。しかも「その方は国々に平和を告げ」（10 節 フランシスコ会訳）るのです。平和をもたら

す支配は、イスラエルばかりか、全世界へとおよんでいきます。

福音朗読では二つの箇所に注目してください。29 節に「わたしは柔和で謙遜な者だから」とあります。「柔和」はギリシア語で「プラユス」といいます。『マタイによる福音書』には三回登場します（5 章 5 節、11 章 29 節、21 章 5 節）。三つ目の箇所は「見よ、お前の王がお前のところにおいでになる、柔和な方で、ろばに乗り」となっています。これは今日の第一朗読の「高ぶることなく、ろばに乗って来る」（ゼカ 9 章 9 節）からの引用です。『ゼカリヤ書』を見てみると「高ぶる」はヘブライ語の「アニ」ですが、これは「アナウ」という単語に由来します。ヘブライ語の「アナウ」をギリシア語に訳すときに「プラユス」という単語を当てはめたのです。元々、「アナウ」は身をかがめて小さくなっている人の様子を表します。そこから経済的に圧迫されたり、虐げられて苦しんでいる人の意味で「貧しい人」と訳されるようになりました（詩編 37 編 11 節：「貧しい人は地を継ぎ」）。そして、自ら小さくなっている人ということで「柔和な人、高ぶらない人」という理解が生まれていきました。

「謙遜」はギリシア語で「タペノイス」ですが、これは「身分の低い人」という意味です。ですので、この部分を直訳すると「心において身分の低い人」となります。

「柔和で謙遜」とは「貧しく、身分の低い」というのが、ことばそのものがもっているニュアンスだったのでしょう。事実、イエスさまは貧しく、しかも律法の教師たちと比べて身分の低い者です。イエスさまご自身が父なる神に頼らなければ生きていけない「貧しい」人でした。そんなイエスさまが「わたしに学びなさい」と呼びかけます。これは「わたしの弟子になりなさい」とも訳せる一文です。

さらに 30 節の「わたしの軛を負い、……わたしの軛は負いやすく……」にも注目してください。

軛は二頭の牛をつなぎあわせるための道具です。牛のサイズを計って、木で軛を作り、牛の首を傷つけないようにていねいに調整したそうです。聖書では主なる神のイスラエルに対する支配を「軛」と呼びました（エレ 2 章 20 節、5 章 5 節、哀 3 章 27 節、ホセ 10 章 11 節参照）。さらに、神の支配の表れとして律法のことも「軛」と呼びました（シラ 6 章 24-31 節、51 章 26,27 節参照）。律法学者たちが民衆に課す「軛」は重いものでした（マタ 23 章 4 節参照）。しかも彼らは、律法の重荷を負わせるだけで、指一本も助けを与えようとはしませんでした（ルカ 11 章 46 節参照）。

しかし、イエスさまは「わたしの軛を負い、わたしに学びなさい」、しかも「わたしの軛は負いやす」いとおっしゃいます。イエスさまの軛とは何でしょうか？　すでに「あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていなければ、あなたがたは天の国に入ることができない」（5 章 20 節）と課題のようにイエスさまは求めておられますので、律法を守るという「正しさ」（義）とは異なる「正しさ」を生きるようにと招かれているのでしょう。「貧しく、身分を低くして」十字架を背負って進まれるイエスさまの生き方に、父なる神に従って生きる「正しさ」があるように思われます。しかも、イエスさまがその重荷を一緒に担ってくださるのです。「彼はわたしたちの患いを負い、わたしたちの病を担った」（8 章 17 節、イザ 53 章 4 節参照）。